
だからといってどうしたわけでもないけれど

a

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だからといってどうしたわけでもないけれど

【Nコード】

N28420

【作者名】

a

【あらすじ】

汚れきった街。猫。絵。

「・・・あなたは美しい」

この客は毎回私を指名して告白してくる。はっきり言って迷惑だ。私はこういったことに馴れていないのでいつも黙ってしまふ。時間がくるまで黙っていたこともあるくらいだ。これさえなければ別に嫌な人ではないのだが。

私は風俗店で働いている。普段は絵を描いているのだが、あまり売れていない。というか全くだ。審査に出しても落選続き。この業界の偉い人達は私に良くしてくれるが、違う目的なのは目に見えているので、あまり関わらないようにしている。私は作品だけで勝負がしたいのだ。半年前から猫を飼っている。仕事先の人（友人ではない）が貰ってくれないかと頼んできて、断れずに引き取ってしまった。名前はつけていない。彼とはお互いマイペースに暮らしている。最近は何に一人で酒を呑むようになった。インスピレーションが沸いてくるからだ。煙草も最近吸い始めた。なんとなく画家っぽいからだ。外に出るときはヨレヨレの古着にカーデイガンを羽織り、ハンチング帽を被って黒縁メガネをしている。それもなんとなく画家っぽいからだ。その姿の時、まさか私を風俗嬢だと思う人はいないだろう。

仕事が終わったので家に帰る。これでまた来週までは自由だ。絵に没頭できる。私はいつものように疲れきった体で家まで歩いてきた。おそらく明日は筋肉痛だろう。そして鍵を開け、自室のドアを開けた。その瞬間、私の意識は消えた。

死が目の前にあるのは分かる、でもそれさえも真っ暗で何も見えない。私は長らく日の光を浴びていない。というより、何も見えない。どうやら自隠しをされているようだ。私が今想うことは書き

かけの絵と猫のことだけだ。

「・・・起きた？」

「・・・うん」

私がこの男と会話するのはいつもこの言葉だけだ。時間の感覚はもはやない。この会話を何回したかも分からない。不思議と最近是不安や苦痛といった感情がなくなってきた。おそらく諦めの境地に達してしまったのだろう。またゴソゴソと何かやっている。音で分かるのだ。きつとまた写真を撮るつもりなのだろう。彼の考えていることはよく分からない。あの日からずっと手足は縛られたままだが、体は定期的に拭く時以外に触れることもない。ただひたすら写真を撮って見つめているだけだ。食事も十分に与えられる。

「ねえ・・・」

「・・・」

「・・・ねえつてば」

私はたまに彼に話しかける。しかし彼は無視する。最初の頃は私もこの生活の繰り返しに発狂寸前にまでなったが、なぜだか最近はずっかり落ち着いてしまった。おそらく私も相当な変わり者なのだろう。常人ならとつくに廃人になっているか舌を噛み切つて自殺しているかだろう。そういった意味では私と彼は似た者同士なのかもしれない。最近は何だか彼に憐みにも似た感情すら覚え始めてきているのだ。

それからさらに永遠にも感じられる時間が経った。ある日、いきなり彼は私を車に乗せて森に連れて行った。でも私は自分が殺されることはないだろうと確信していた。それは彼との生活の中で分かったことだった。なぜなら彼は私を愛しているからだ。しかもとても深く。

車は森に着き、目隠しと手足の紐は外された。目隠しを外されてからも私の目は見えなかった。彼は私をおぶつて森の中へと入って行った。私はもう自力では歩けない体になっていた。二、三分歩いたところで彼は立ち止って私を丁寧に降ろし、そして激しく犯した。

こんな事はこの生活が始まってから初めての事だった。私は今まで味わったことのない程の快楽を感じ、何度何度もオーガズムに達した。犯されながら彼の顔がぼんやりと見えてきた。見覚えのある顔だった。しかしどうしても思い出せない。行為が終わると彼は近くの木によじ登り紐をかけ始めた。

「だめ・・死なないで」

自分でも思いもよらない言葉が出てきた。なぜだか涙が頬を伝っていた。準備が終わると彼は紐を首にかけ不器用な笑顔を作りながら私に言った。

「・・ありがとう」

彼は木から飛び降りた。口から泡が出て、一瞬のうちに息絶えた。その時になって初めて私は彼が誰なのかを思い出した。彼はいつも私を指名していた客だった。

あれから三日が経った。よく覚えていないが、どうやら自力で自分のアパートに戻ってきたらしい。彼の死体はそのままにしておいた。帰ってきたら猫は死んでいた。私の荷物は全部彼の車に入っていたので、無くなった物は何もない。ただ時間だけが過ぎただけだった。しかもその時間さえも一カ月程しか経っていないかった。私は家に帰ってから何事もなかったかのようにひたすら絵を描き続けた。今まで感じたこともない程に絵を描きたい衝動に駆られたのだ。それから三日三晩絵を描き続け、その絵は燃やした。その絵は彼の肖像画だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2842o/>

だからといってどうしたわけでもないけれど

2011年1月26日03時17分発行